♪坂本圭さん　《水色のワルツ》演奏

高木東六さんといえば《水色のワルツ》。昭和 25 年に大ヒットし，今でも愛され続けている昭和の名曲です。

フルート演奏は，坂本圭さんでした。坂本さんには，この後もプログラム掲載の曲目をご披露いただきます。どうぞ楽しみになさってください。



坂本 圭 氏

本日は，講演と音楽「1930 年，日本の若き芸術家パリに遊ぶ―高木東六と仲間たち―」にようこそおいでくださいました。ありがとうございます。

ご挨拶が前後いたしました。藤井浩基と申します。高木東六さんの出身地，鳥取県米子市からまいりました。米子市生まれ，米子市在住です。仕事場は島根県の松江市です。島根大学教育学部で音楽教育の教員をしております。



藤井 浩基 先生

私は約 30 年にわたって高木東六研究をしてきました。東六さんは，1904 年（明治 37）7 月 7 日生まれ。亡くなられたのは 2006 年（平成 18）8 月 25 日。102 歳で天寿を全うされました。今年は没後 20 年です。

私は生前に何度かお会いしています。この写真は 1999 年に横浜のご自宅にうかがったときの写真です。このとき 95 歳。とてもお元気で，しっかりした記憶力には驚きました。ところで本日，私は「東六さん」と呼んでおりますが，当時はもちろん「東六先生」と呼んでおりました。今日の講演では東六先生のほかにも「先生」とお呼びすべき方をたくさんご紹介しますが，逐一，「先生」を付けていたら，堅苦しくなってしまいますので，今日は基本「東六さん」「〇〇さん」のように呼ばせていただきます。文脈に応じて敬称を付けたり付けなかったりするときもあります。ご関係の方々もおみえですので，その点最初におことわりし，ご了承いただけたらと存じます。

さて，私が高木東六研究で書いた論文をお送りすると，いつも，丁寧にお返事をくださいました。「よくお調べになったと驚いている次第です。ありがとうございます」と書いてあります。このように大変筆まめな方でした。筆まめなところは若いときからだったようです。今日お話しますのは，今から 96 年前の 1930 年前後のパリ留学中の日記についてです。

コロナ禍前の 2019 年，東六さんのお嬢さま，高木緑さんから５冊の日記をお借りしました。緑さんは，東六さんが亡くなられた後，遺品整理をしていて見つけられたのだそうです。戦前の東六さんの楽譜や資料の多くは，太平洋戦争末期の東京の空襲で焼けてしまいました。その中で，奇跡的に残った 96 年前の日記です。１冊 400 頁全部で 2000 頁あります。昭和２年から昭和６年まで，１年に 1 冊，ハードカバーのしっかりした日記帳です。そのうち３年あまりが，パリ留学時代の日記で，これだけで約 1400 頁になります。私はこれらを解読して，パソコンに入力しました。「翻刻」という作業です。すべて青インクの万年筆で手書きされています。書き慣れておられますが，独特の個性のある字です。まず慣れるのが大変でした。そして内容を読み解いたり，書かれている人物や地名，内容を逐一調べたりしながら，結局，５年かかりました。

昨年，東京の勉誠社より『高木東六パリ音楽留学日記 1928 年～1931 年』を出

版しました。残念ながら，日記をお貸しくださったお嬢様，緑さんは３年前にお亡くなりになりました。日記を本にすることをお許しいただき，ご覧に入れることを約束していましたが，間に合わせることができず，それが本当に心残りです。



高木東六　恩師ポール・ブローと

1930 年 浜口陽三 撮影　　提供：高木緑氏

プログラムにもありますこの写真，東六さんが雑誌などのインタビューでパリ時代を語るときによく用いた写真です。隣は東六さんがパリでピアノのレッスンを受けていたポール・ブロー先生です。作曲家のセザール・フランクとも親しかったという高名なピアノの先生でした。写真を撮影したのが，銅版画家の浜口陽三さんです。ブロー先生と一緒に写真を撮るために，浜口陽三さんにカメラマンをお願いし，ピアノのレッスンについてきてもらいました。1930 年 7 月 31 日の高木東六さんの日記から抜粋します。

「サアー どうだな。いつもより勉強したかな」と先生に言われるとゾッとする。

「何を勉強して来たか」と訊かれる。

「バッハとベートーベンと，ショパンとフォーレの四つです。バッハは，プレリュードだけで，フーガは弾いて来ませんでした。わたしには，記号の関係で少し難しいのです」

「おお，何というなまけものの生徒だろう‼　ピアニストだよ。商売がピアニストですよ」と，冗談半分，怒り半分の表情で肩を打たれる。

弾いた結果は，バッハが怒られ，ベートーベンが怒られ，ショパンは割合気に入られたが，ペダルの点でやられ，フォーレは，遅すぎて面白くないと言われた。優に一時間半のレッスンだった。

約束の如く，浜口が写真機を持って入って来る。今日は，夏休み前の最後のレッスンなので，僕が浜口に頼んでおいたことであった。レッスンが終わって，先生と二人して写真を撮る。

浜口を絵かきだと先生に紹介してあったので，サロンや廊下にかかっている絵を，浜口に見せていた。

浜口は，何でも「Très bien」一方で通しているので，可笑しくてならなかった。

レッスンで叱られる東六さん，ご機嫌ななめのブロー先生でしたが，浜口さんのTrès bien連発で少しは雰囲気が和んだのではないでしょうか。

東六さんと浜口陽三さん，とても仲良しだったんですね。この写真も浜口さんが撮影したことは，この日記の翻刻で明らかになりました。そういうご縁もあって，今回，こちらミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクションでこの催しをさせていただくことになりました。

さて，東六さんの「東六」という名前，あまりない名前ですよね。これはお父さんの高木久吉さんがつけられました。「東」は東の方角，「六」は「六合」。「六合」とは東西南北，四方に天地を足したもので，６つの方向が合わさったもの，すなわち世界を表す言葉です。日の昇る東から世界を照らせという願いで命名されたそうです。

お父さんは，ハリストス正教会の伝教師として，当時，米子で布教活動をしていました。

ハリストス正教会は，ギリシャ正教の流れを汲むキリスト教の一派です。ロシアから宣教師ニコライによってもたらされました。日本での布教の拠点は，東京のお茶の水にあるニコライ堂です。お父さんが赴任した米子の教会は，日本家屋の自宅の一室を礼拝室とした小さな教会でした。

大主教と呼ばれたニコライは日記を残しています。そのなかに，東六さんのお父さん・久吉さんとお母さんの勝さんが，ニコライ大主教にオルガンを買いたいので，お金を援助してほしいという手紙を送っていたことが書かれています。お母さんはオルガンを弾くことができたのですね。明治の時代に自分の家にオルガンがあるのは非常に稀だったはずです。東六さんは，音楽に接するには何よ

りの恵まれた環境にいたといえるでしょう。

東六さんが生まれた 1904 年（明治 37）は，日露戦争が始まった年です。ロシア由来のキリスト教を布教している久吉さんへの風当たりは米子でも強かったようです。1908 年７月に，久吉さんはニコライ大主教から茨城に転勤を命じられ，15 年過ごした米子を離れます。東六さんは満４歳まで米子にいたことになります。その後，久吉さんの赴任先を転々とするなかで，本格的にピアノを習い始めます。

1924 年（大正 13）に晴れて東京音楽学校に入学。ピアノを専攻します。音楽学校時代の東六さんを一言で言うと「生意気な学生」でした。時に，校長や教授の批判も行う反骨精神の持ち主でした。当時の東京音楽学校の校長は音楽の専門家でなく，「余は音楽を好まず」と公言していました。当然，学生たちは反発します。その中心人物のひとりが東六さんでした。校長と学生の対立は収まらず，新聞沙汰にもなりました。その校長には，卒業生も不満をもっていました。卒業生で当時すでに有名な作曲家であった山田耕筰は東六さんたちを応援します。縁とは不思議なもので，この騒動がきっかけで，東六さんは山田耕筰と親しくなり，後に作曲家への道を勧められるようになります。1928 年（昭和３） 3 月 30 日の日記からの抜粋です。

この十日間は，少なくとも，われら学生にとっては，その毎日毎日が，革命であった。各班に分けて，教師達を詰問した。校長の自宅に押しかけ，上がり込んで詰問をした勇敢な男もいた。一同，決心をはっきりもっているので，この際，遠慮はなかった。バンバンやった。学校でこんなに緊張した事件はなかっただろう。おそろしかったが，限りなく愉快だった。

校長はあとから来て，われわれ一同をどなりつけた。俺と四ノ原だけは，特に残って調べられた。家から，父も呼ばれた。しかして，退学を言い渡されたのだ。

結局，この騒動によって東六さんは音楽学校を退学せざるを得なくなりました。卒業まであと数ヶ月というときでした。東六さんは次なるステップを考えます。それがパリ留学でした。東六さんは，親族からお金を工面してもらい，個人的な人脈を頼って，1928 年 12 月，横浜から船でパリへ旅立ちました。約 45 日

の長い船旅を経て，花の都パリに到着。その翌日 1929 年 1 月 30 日の日記からの抜粋です。

メトロを下りて，オペラ通りを歩く。夕方の五時ごろだった。
何という人出か。電気の広告燈，ショーウィンドウの装飾，街角の彫刻。
パリはすごい！　大都会の空気のどよめきに，のまれるような気がした。
夜の十時頃，セーヌ川のほとりを通って，ノートルダム寺院の下に来る。
見上げると，真っ黒な冷たい冬の空に，二つの塔が，ニュウッと，そびえていた。

パリに着いたばかりの興奮が伝わってきます。そして東六さんにとって何より刺激的だったのは，パリでの演奏会でした。1929 年 2 月 12 日の日記には，オペラ座でドビュッシーの作品ばかり取り上げた演奏会に行ったことが記されています。東六さんはパリ留学中にドビュッシーのピアノ曲に取り組み，帰国後もリサイタルで取り上げたり，楽譜の校訂をしたりするなど，生涯ドビュッシーは特別の思い入れがあった作曲家でした。

東六さんはパリに着いたとき，ほとんどフランス語ができなかったようです。日記では，耳で聞いたフランス語をそのままカタカナで書いている箇所が多数あります。ドビュッシーは，「デビュッシー」「デビッシー」「デブッシー」などと書いてありました。

それでは，ここで坂本圭さんの演奏で，ドビュッシー作曲の《シランクス》をお聴きいただきたいと思います。1913 年に作曲された無伴奏のフルートの作品です。

♪ 坂本圭さん　《シランクス》演奏



パリでは見るもの，聴くものすべてが新鮮で感動の連続。しかし，それはほんの束の間でした。あこがれのパリに来てはみたものの，思い描いていたバラ色の留学生活とはほど遠いものでした。すぐには音楽学校に入れず，まず，パリ音楽院のピアノの先生を紹介してもらい，ピアノの個人レッスンに通い始めました。ここで東六さんの世話をしてくれたのが鈴木崧さんでした。東六さんより６歳年上では，慶応大学を出てパリのソルボンヌ大学に留学し，そのままパリで会社勤めをしていました。文学，美術，音楽，バレエ，映画など芸術にも精通し，幅広い人脈をもっていました。パリで活躍中の藤田嗣治のアトリエにも出入りし，絵の勉強もしていました。東六さんにピアノの先生を紹介したのも鈴木崧さんで，一緒にピアノのレッスンに行き，通訳もしてくれました。

この鈴木崧さん，フランス人の奥さんがいて，その間に小さな男の子がひとりいました。義（ただす）くんといい，フランスの名前では「ギー」と呼ばれていました。東六さんは最初ホテル住まいをしながら，アパートをさがしましたがなかなか見つかりません。鈴木崧さんの家に厄介になっていた時期もありました。しかし，そのころ鈴木崧さんと奥さんの間にすきま風が吹き始め，結局離婚に至ります。その間，東六さんは，ふたりの間に入って心を痛めます。鈴木崧さんはその後，日本に帰国し，映画の輸入，配給の会社を立ち上げました。また画家としても活躍しました。

鈴木夫妻の男の子，義くんは，フランス人の奥さんが引き取りました。義くんは成人すると，父親の影響か，やはり映画関係の仕事に就きました。そして，さらにその子ども，つまり鈴木崧さんの孫も映画のカメラマンになりました。リシャール・スズキといい，この人は 1972 年に世界的にヒットし，日本でも社会現象にもなったフランス映画「エマニュエル夫人」を撮影したことでも知られています。

パリに着いて２ヶ月も経たないうちに，今度は，お父さんの久吉さんが亡くなったという知らせが日本から届きました。ショックが重なります。

苦労してかき集めてもってきたお金も，レッスンや生活費であっという間になくなっていきました。追加の送金もなかなか届きません。友人から借金をし，かろうじて食いつなぐ毎日。いよいよお金が底をつき，絶望して，エッフェル塔から飛び降りようとしたこともありました。1929 年８月７日の日記からの抜粋です。

ひとりで，セーヌ川の河岸を歩く。
眼の前に見えるエッフェル塔の真下まで歩いて行こうと決心した。
塔の真下に来て上を見上げた。
その壮大さ，規模の大きさにぞっとした。
のぼってみようと，ふと思った。
エレベーターが上に昇るにつれて，鉄骨の間から，パリの街がぐんぐんひらけて行く。
肝が冷える，とはこんな気持ちだろう。ふと「高いな」という感じで下を見おろすと，足もとが，ガチガチという。
「今，俺は，世界一の高い塔の上にいるのだ」
頂上で，僕は「金のない悲哀」と「死」とを，同時に考えていた。充分に飛びおりることのできる手摺だ。縄も何も張っていない。
僕に，この際，死ねる勇気があってくれるといい。

何とか思いとどまったものの，悪いことは続くものです。その年の秋に，スコラ・カントルムというパリの音楽学校を受験したのですが，うまくいきませんでした。そこで，スコラ・カントルムのピアノの教授，浜口陽三さんが撮影した写真に写っていたブロー先生に，プライベートでレッスンを受けることになりました。

東六さんのパリ留学１年目 1929 年は，住まい探しに明け暮れ，お金もなくなり，音楽学校受験もうまくいかず，日本からお父さんの訃報が届き，居候していた夫婦のいさかいに巻き込まれ，フランス語もままならず，まさに八方ふさがりの１年でした。もう日記を書くどころではなかったのでしょう。翌年 1930 年は５月になるまで，日記の記述がめっきり減ってしまいます。

しかし，転機が訪れます。やっと安心して生活できる住まいが見つかったのです。パリ郊外にあるムードンという街に，まかないつきの下宿が見つかりました。下宿を紹介してくれたのが画家の島崎鶏二さんでした。1930 年５月のことです。日記も再開します。どういう経緯で鶏二さんと出会ったかはわかりませんが，この頃から急に鶏二さんとの交遊が毎日のように日記に記されています。

島崎鶏二さんは，文豪・島崎藤村の次男です。東六さんより３歳年下でした。幼少期から絵の才能を発揮し，川端画学校に学び，二科展で入選した後 1929 年

の春にパリにやってきました。お父さんの島崎藤村も 1910 年代に約３年間，パリで過ごしたことはよく知られています。

ムードンは，パリから電車で 30 分ほど南西に行ったところにある，静かで緑豊かな郊外の町です。私は 2012 年にムードンに行ってみました。東六さんが住んでいた下宿は，新しいマンションに変わっていました。でも，東六さんが歩いた坂や道，電車を乗り降りしたムードンの駅舎も同時の面影を残していました。

鶏二さんは，アトリエのあるよいアパートがパリ市内に見つかったので，引っ越します。その後に東六さんが入ることになりました。ダンドー夫人という未亡人のおばあさんの邸宅で，ピアノを弾ける広い部屋がある，願ってもない生活環境でした。東六さんを我が子のように可愛がり，仕送りが滞り困っているときには，お金の面でも助けてくれました。東六さんは晩年まで，生涯の恩人として，真っ先にダンドー夫人を挙げていました。鶏二さんもダンドー夫人に可愛がられており，引っ越し後も夫人や東六さんに会うため，度々ムードンを訪れています。

鶏二さんは音楽が好きで，自らアコーディオンも弾き，パリではチェロも習っていたそうです。ムードンに来ると東六さんにピアノを弾いて聴かせてほしいと頼みました。1930 年９月 13 日の日記からの抜粋です。

正午起きる。朝寝の癖は永久なおらないらしい。午後三時頃，昼飯に行く。お金入れを忘れて，更に家に引き返してきた時，島崎が来た。

ピアノで，ショパンのポロネーズ，ワルツ・ブリランテ，バラードを島崎のために弾いてきかせた。

「随分むずかしそうな曲だね」と言っていた。フランス，海外まで，わざわざピアノの稽古にやって来て，未だ，ショパンのバラード位の曲が，ハッキリと弾けないのだから，本当に情けなくなる。

早く，上達したいものだ。

鶏二さんが好んでリクエストしたショパン。お孫さんの坂本圭さんのフルートでお楽しみいただきましょう。有名なノクターン Op. 9-2 です。

♪坂本圭さん演奏　ショパン《ノクターン Op. 9-2》

ここで 10 分間の休憩をいただきます。===== 休憩（10 分）=====

パリ留学２年目の 1930 年。鶏二さんのほかにも，東六さんの周りには，さまざまな分野の仲間が集まりました。銅版画の浜口陽三さん，洋画の吉井淳二さん，海老原喜之助さん，中西利雄さん，フランス演劇研究・文学が専門の川島順平さん，異色なところでは柔道家の石黒敬七さんらです。

毎晩のように，パリのモンパルナスやサン・ミッシェルなどパリ左岸のにぎやかな界隈に集まり，カフェーやキャバレーを巡ったり，ビリヤードに興じたり，ダンスホールに行ったりして，夜明かしをすることはしょっちゅうでした。東六さんはモンパルナス駅発の終電にいつも乗り遅れ，戻って仲間と再び合流し，カフェーで朝まで一緒に過ごします。1930 年 8 月 17 日の日記からの抜粋です。

支那めしへ行く。川島君と逢う。彼は「この辺りへ来れば，必ず，君達に逢えると思ったから」と言っていた。

玉を突こうとしたが，しまっていた。カフェー・ヴェルサイユで，おしゃべりして，川島の好きなバルザールへ行く。

その後，強いて，誘って，クーポールへ入る。

恋愛論，人生論，芸術論，女性観論の凡てを，かなりロジックな口調で，川島は，文学をやってるだけに，語り出すのだった。

川島は五時半頃帰る。和泉はバルザールで別れたのだった。

島崎と二人，セレクトに入る。七時までいて，また場所をかえて，カフェーに入る。七時からのお湯に行ったが，今日は生憎休み。

島崎の家へ行って，泊まることにした。タクシーの中では，割合眠くなった。



モンパルナスの駅の周辺には，有名なカフェがたくさんあります。東六さんたちが夜な夜な過ごした老舗のカフェが，今でも当時と変わることなく営業しています。これは東六さんたちが頻繁に通ったクーポールというカフェーというかレストランです。日記によれば，ここのコロッケが大好物だったようです。私も２年前に行ってみました。そのほか，日記には数限りなくカフェやレストラン，キャバレーなどの名前が出てきます。それらをはしごして朝まで過ごし，朝の電車でムードンに帰って昼間に寝て，また夕方からモンパルナスに出かけるという完全な夜型生活が続きました。

時にはモンパルナスで物足りず，時にはかなり距離のあるモンマルトルまで足を伸ばすこともありました。この写真はモンマルトルの有名なキャバレー，ムーラン・ルージュです。赤い風車が目印です。

ほろ酔い気分でパリの街を闊歩する若き日本人芸術家たち。1930 年 8 月 10 日の日記からの抜粋です。

「からたちの花」の四部合唱を，約三分の一位纏めた。アヴェニュー・フォーシュを歩いて，エトアールをぬけて，シャンゼリゼーを通り，コンコールドに至り，カフェー・マドレーヌに至るまで，何里位あるか知らないが，歩きながら，歌い通しである。

東六さんは，作曲や編曲の試作をしては，友人たちに歌ってもらい，反応や響きを確かめていました。《からたちの花》をみんなで歌えるように四部合唱に編曲したようです。北原白秋による《からたちの花》の詩は 1924 年に，山田耕筰

がつけた曲は 1925 年に発表されたばかりで，当時は新しい曲でした。

東六さんは，東京音楽学校での校長排斥運動の時から山田耕筰さんと親しくなり，留学中の 1931 年５月にはパリに山田さんがやってきて，東六さんはパリの案内を買って出ます。そのときに，山田さんのすすめで作曲家への道をめざし始めました。

それでは，ここで坂本圭さんのフルート演奏で《からたちの花》をお聴きいただきましょう。坂本さんのお祖父様，鵜二さんも，浜口陽三さんも《からたちの花》を合唱していたんですね。それでは，お願いします。

♪坂本圭さん演奏　山田耕筰《からたちの花》



パリは，音楽の勉強をするには何よりの環境でした。東六さんは生活費を削って，コンサートのチケットにはお金を惜しみませんでした。現代の私たちから考えると夢のような演奏会を聴いています。ラヴェル自身が指揮をしたボレロ，リヒャルト・シュトラウス自身が指揮をしたやはり自作の演奏会，そしてラフマニノフのピアノリサイタルも聴いています。1930 年 11 月 22 日の日記からの抜粋です。

今夜は，ラフマニノフのピアノリサイタル。大入満員だった。

時々，音をはずすが，立派な音には驚いた。どうしてあんなビンと張った，力強い音が出るのか。

いくらでもきりがなくクレッシェンドができる人だ。

テクニックも大したものだが，この人は頭の方が百倍も進んでいる。演奏の態度も実に悠々として，品があって，立派だった。

演奏会には美術の仲間たちも誘って一緒に行くこともしばしばでした。ラヴェル自身が指揮したボレロの演奏会では，居眠りを始めた仲間もいて東六さんはヒヤヒヤしたとか。

若き日本人芸術家たちがパリに遊んだ 1930 年。翌 1931 年になると，ひとりふたりと帰国への足音が近づいてきます。1931 年６月９日の日記からの抜粋です。

帰り，カフェー・ラヴニューで島崎達と逢う。

慌しく日本へ帰ると言う。此の二十六日出帆の箱崎丸に定めたと言っていた。

送別会を来る十三日日本人会でやることにして別れる。川島にその方をたのみ，通知は僕が引き受けた。いよいよ帰る，帰ると言っていた島崎も帰国することになったのは淋しいことだ。ともかく巴里に於ける最も親しい好きな友の一人に先に行かれることは淋しい気がする。

島崎鶏二さんが帰国することになり，川島順平さんと東六さんが幹事をつとめることになりました。1931 年も後半になると，鶏二さんを追うように仲間が次々にパリを離れ，東六さん自身も帰国が視野に入ってきました。残りの留学期間を有意義に過ごそうと，夜遊びをやめピアノに集中します。夏にはブロー先生の別荘で，門下生とともに合宿生活も送りました。

そして，夏休みが明けてスコラ・カントルムの受験に再挑戦し合格。２年越しで晴れて正規生としてスコラ・カントルムに通うことになりました。この学校でピアノと作曲を専門的に学びました。

スコラ・カントルムの卒業生には，有名なエリック・サティがいます。また，当時活躍中のラヴェルもよく来ていたようです。

東六さんが学んだスコラ・カントルムの写真です。私が 2012 年に訪問した時

に撮影しました。東六さんの在籍記録がちゃんと残っていました。ムードンの住所も書いてありましたし，ブロー先生のクラスに所属していたこともわかります。

パリ留学期間の最後を充実した学びで締めくくった東六さん。日記は 1931 年 12 月 23 日で終わっています。1932 年の日記はありません。そもそも書いていなかったのか，書いていたけれど無くなってしまったのか，わかりません。書いている暇もないぐらい一生懸命音楽の勉強に打ち込んでいたのでしょう。

1932 年（昭和 7）の３月，約３年あまりの留学生活を終え，東六さんは帰国します。これは帰りに乗った諏訪丸での写真です。途中ナポリで日本に向かうチャップリンが乗船してきたそうです。これは 1932 年３月 20 日に諏訪丸のデッキで撮影された記念写真です。

帰国した東六さんは，早速，音楽活動を始めます。その年，東京でピアノリサイタルを開いて成功を収めました。フランス音楽を紹介するほか，ピアノの楽譜の出版，翻訳もしました。もちろん作曲でも活躍します。

ここで面白い映像をごらんいただきましょう。東六さんが帰国後まもない 1932 年９月，メゾソプラノの佐藤美子さんの伴奏者として，静岡県島田市に演奏旅行に訪れたときの映像が残っています。島田市よりご提供いただきました。演奏会の前後に，周辺を観光する様子が撮影されています。今から 90 年以上前のフィルムです。本当に貴重だと思います。

ステッキをもってダンスをしているのが東六さんです。気づかれましたか。

パリでは仲間たちと真夜中にダンスホールに行くこともしばしばでした。その成果でしょうか。なかなかの足さばきでしたね。

帰国した後も，パリの仲間たちと交流は続きました。これは東六さんが川島順平さんに出した暑中見舞いの葉書です。お嬢様の川島瑞枝さんにご提供いただきました。川島順平さんも東六さんと同じ頃に帰国したようです。1932 年（昭和７）８月 10 日の消印があります。

暑中御見舞申し上げます。今日この頃の暑さに如何暮らしていますか。日本の

夏はほとほと閉口している。島崎，鈴木，和泉達と時々逢う。何か変わったことでもあったら是非ご一報して下さい。

話にきけば，君も何処かへ旅行している由。僕も今月，たぶん北海道の方へ演奏旅行に出かける。ご自愛を祈る。

島崎鶏二さんには，東六さんの作曲した楽譜集『行進曲と舞踊曲』の装丁を依頼しています。1938 年（昭和 13）に出版されました。このように分野を越えて互いの才能を生かしながら新しい芸術の創造を試みていたのですね。

しかし，1930 年代も後半になると，パリの仲間達にも戦火の足音が忍び寄ってきました。音楽家の東六さんは，軍歌の作曲，戦地を巡回する慰問演奏に駆り出されました。画家もまた従軍画家として動員されました。

浜口陽三さんは 1940 年 1 月に帰国。しかしフランス語が堪能だったことから 1941 年以降，日本政府や陸軍のフランス語通訳としてフランス語圏のベトナムやラオスに派遣されました。マラリアにかかり，終戦はベトナムで迎え日本には 1946 年の夏に戻ります。やはり，フランス語がよくできた川島順平さんもまたベトナムやラオスに通訳として派遣され，ベトナムで抑留生活を送り 1946 年 4 月に帰国します。

ひとりだけ，戦後，姿の見えない仲間がいました。島崎鶏二さんです。

鶏二さんは東六さんや川島順平さんらより少し早くパリから日本に戻りました。帰国直後から画家として活躍し，二科展の常連となり名声を確立しました。戦争中は満州や大陸各地を回り，新聞や雑誌に現地のスケッチや文章を寄稿していました。父・島崎藤村氏が 1943 年８月に亡くなります。翌 1944 年４月に，海軍の嘱託としてインドネシアにあるマカッサル研究所に派遣されます。南方占領地域の調査や情報収集を行う研究所で，鶏二さんは半年あまり従軍画家として勤務します。10 月，いよいよ日本に帰るという途中で，飛行機事故により亡くなります。乗っていた水上飛行艇がタラカン島沿岸で着水に失敗し，帰らぬ人となりました。鶏二さんの弟で，やはり画家だった島崎蓊助さんの自伝には事故の経緯が詳しく書かれています。

今日フルートを演奏してくださっている坂本さんのお父様は飛行機の研究をなさっており，鶏二さんが搭乗していた飛行艇の精巧なミニチュアを作ってお

られます。鶏二さんは，子供さんへのお土産を取りに，海に沈んでいく飛行艇の底の方に下りていかれたとお聞きしました。

戦後，東六さんは新たな音楽活動を幅広く展開します。特に，昭和 30 年代後半からはテレビの音楽番組で大活躍します。軽妙な語り口，そして時に毒舌を吐くユニークな東六さんのキャラクターは，お茶の間でも人気を博しました。東六さんは，高度成長時代とともに活動の場を拡げ，作曲家という存在，プロの職業をお茶の間に知らしめた，まさに時代をリードした音楽家でした。

東六さんは文筆活動にも積極的でした。日記をあれだけ書くぐらいですから，慣れたものです。新聞や雑誌の記事やエッセイも，スラスラと話すように書き，これまた軽妙な文章が人気を博し，あちこちから原稿依頼が舞い込みます。本もたくさん書いています。

東六さんは元気に年齢を重ね，90 歳代半ばまでは現役で，演奏会や講演会をしていました。まさに「健康・長寿」の象徴で，ここでも高齢化社会における理想的な年の取り方が注目されました。その点でも，時代の流れにピタッと合った人でした。

戦後も仲間たちの交遊は続きました。東六さんと川島順平さんは雑誌で対談しています。このとき川島さんは母校・早稲田大学の教授で，フランス演劇研究者，劇作家としても大活躍なさっていました。昭和 34 年（1959）のヤマハニュースという小冊子です。「やあ！まあ！はあ！」とタイトルも面白いですね。対談からの抜粋です。

高木：とにかく毎晩会わなければ寂しかったんだよ。君とか島崎鶏二（藤村の二男）や，浜口陽三（ヤマサ醤油の三男）などとほとんど毎晩顔を合わせて，球を突いたり踊ったりしたわけだ。

川島：実によく遊んだもんね。



後列　右から２人目　吉井淳二（洋画）

右端　　島崎鶏二（洋画）

左手前　　鈴木聡（チェロ）

2 列目左　川島順平(劇作家､フランス演劇研究)

前列　井口基成（ピアノ）

浜口陽三（洋画のちに銅版画）

高木東六（作曲家）

寄贈：川島瑞枝氏

今年は高木東六さんの没後 20 年です。今日ご紹介した方々が故人となられてから，ずいぶん年月が経ちました。しかし，この間も，ご遺族やご子孫が交流なさってきました。

これは東六さんのお嬢様，高木緑さんが島崎鶏二さんのお嬢様（坂本さんのお母様）に送られたお手紙です。

鶏二さんとはとてもいい友達だったようです。それだけに，思いがけず亡くなられた時のショックは父にとってどんなに大きかったか，と思われます。
「島崎けいが生きていたら‥‥‥」と云うのを何度も聞きました。父は，いつもけいと云っていました。

今日，こうして浜口陽三さんの美術館で，高木東六さん，川島順平さん，そして島崎鶏二さんほかパリでのお仲間の話をさせていただきました。本日，ご関係の方々がおいでくださっています。この催しが，100 年の月日を超えて，パリに遊んだ若き芸術家を偲び，ご関係のみなさまの交流の場になれば，私も研究者としてこれほど嬉しいことはありません。

最後に坂本圭さんのフルートで，この会を締めくくりたいと思います。曲は《椰子の実》です。ご承知のように，坂本さんの曾祖父様に当たる島崎藤村作詞，大中寅二作曲です。「名も知らぬ 遠き島より 流れ寄る 椰子の実一つ」。太平洋

戦争で，南方の戦地に送られた日本兵が，国に帰りたいという思いをのせてよく歌ったというエピソードが知られています。

島崎鶏二さんも日本の家族や仲間に思いを馳せながら，父・藤村氏の作詞による《椰子の実》を口ずさんだのではないでしょうか。

それでは，坂本圭さんの演奏で《椰子の実》です。

♪坂本圭さん演奏　大中寅二《椰子の実》



以上をもちまして，講演と音楽「1930 年，日本の若き芸術家パリに遊ぶ―高木東六と仲間たち―」を終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。



2026 年 10 月 31 日（土）　会場：ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション